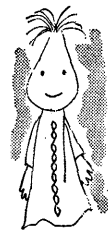


幼児教育に“ゆとり”と“ゆめ”と“ゆたかさ”を



松隈玲子

○心のゆとり・待つ保育

「保育者が心のゆとりをもてる時」とはどんな場合であろうか。

一九七二年に、保育科の卒業生に対して調査したアンケートの回答をまとめると次のようである。

- 一人一人の子どもをよく理解し、子どもと心が通じあう時
- 保育経験を積み、与える教材や日案に対する幼児の反応が予想できる時

● 子どもばかりでなく、親（とくに母親）とのコミュニケーションが円滑に結ばれ、自分の保育を理解してもらえた時

● 突発的な事柄が生じた時でも、すぐ全員を把握できる程度の人数（一人の教師に園児二十名以内）を担任した時

● クラスの子どもの年齢や発達差が著しく異なるものや、特別に手のかかる子どもがいない時

● 保育者が健康で疲労感がなく、その日の保育の準備が充分にできている時

その他、キリスト教保育を行なっている保育者からよせられたものとして

● 保育者が神を信じることによって生きるということに確信をもち、子どもに述べ伝えるものの対象を明確にもっている時

● 保育者自身が神に生かされているというよるこびが心にあふれている時

などがみられる。

この調査によせられた、多くの保育者たちの意見の中から、日々子どもとのふれあいの中で、右にあげられたような「心のゆとりをもてる時」を大切に思い、「ゆとりある保育」を願いながら、さまざまな社会の要求や園の事情などから、自分の理想とする保育のあり方と、現状との問題に悩む保育者の実状を、うけとめる

ことができた。

このような現状にある時、望ましい保育の場、理想とする保育理念の達成を究極の目的と考えながらも、現在、日々育ちゆく子どもたちのために、すぐにでももつことのできる、あるいは、もてるように努力していくことのできる「保育者としての心のゆとり」を考えてみたい。

心のゆとりとは、心が無目的に空白の状態にあることではない。目標達成に対する十分な見通しの上で、現状と目標との間の行程をあせらず、着実にすすんでいく気持をもてることであり、自己を客観的にみつめ、一つの目標に向かって例えまわり道であっても希望を失なわず、困難に堪え、障害に打ちかかっていくことのできる心のもち方であると考ええる。以上の立場から、心にゆとりのある保育のあり方を、若干の事例を通して明らかにしたい。

一 あるがままの子どもを、あるがままの状態でうけとめ、そこから共に歩みをはじめようとする保育者であること

これは、私が幼児教育の道へ足をふみ入れて間もなく、故人となられた福永津義先生にさし示された、次のことばから導き出されたものである。

「人間はみな神の作品であるから、神の作られたものに、出来

そこないはない」この教えは、爾来ずっと私の心のささえとなり、基本的な幼児教育の理念の源となった。

あるがままの子ども、それがどんな子どもであっても、神さまのご計画のうちに生かされている子どもであることを思い、そのままの状態でしっかりと受けとめ、そこから共に歩みをはじめようと願う保育者の心、それは、子どもが幼稚園から帰った時、「けんかをしなかったか」「叱られなかったか」とたずねて後、はじめて「よい子」であったことをほめる母親ではなく、帰ってきたわが子をそのままの姿で受けとめ「お母さんは待っていましたよ」と優しく迎え入れる母親の心であり、昨日はどんないたずらやまちがいのあった子どもでも、今朝登園してきたその子を全く新しい気持で暖かく迎え、受け入れることのできる教師の心でもある。

保育の場についてみると、保育者はともすれば集団統制がよくとれている時には、個人を十分に把握しているような気持におおくり、集団のレベルからはみ出る子どもたちのみの指導にとらわれがちとなる。しかし個人を大切に考える立場からは、一つの集団がみな標準化され、画一的な頭ならしの指導が行われることは望ましくない。保育者が心のゆとりをもつということは、「目だたない子」を「存在を忘れられた子」にしてしまわないためのキ

イポイントであり、集団に入れぬ子、集団をみだす子を、集団の外においてみるのではなく、その子をも含めた広い集団としてとらえることのできる目を養うことであると考える。

二 自分を大切に思う気持と同様に他人をも大切に思う、思いやりの心を、保育者と子どもとの日々のふれあいの中で、さまざまな経験を通して、共感の中から育てていこうとする保育者であること

自分を大切に思うのと同様に他人を大切に思う心は、自分をも他人をもよく知るといふことをぬきにしては育たない。保育者は子どもたちとの日々のふれあいの中で、共にするさまざまな経験を通しての共感の時を、大切に考えたい。

例えば、障害をもつ子をうけいれる場合でも、基本的な理念として考えたいのは、障害児の障害を保育者も他の子どもたちもあるがままにうけとめ、適切な理解の上になつて、共に仲間としての歩みをはじめることが大切であり、障害に気づかぬふりをして、可哀そうだから手伝つてあげようという安易な同情心を育てることではなく、「このお友たちには、今、何を手伝つてあげ、何を自分でさせることがほんとうの思いやりであるのか」を判断し、障害児を仲間として共に歩んでいく子どもを育てることであ

ろう。このことはまた、障害をもつきょうだいのある子が、同じ集団にいる障害児に何の構えもたず接することができる、祖父母同居家庭の子どもが、老人ホーム訪問の際に、すすんで老人のそばに坐り、肩たたきの役を引きうけること、年齢差のない弟妹をもつ年長児が、縦割りクラスでの年少児との遊びがよくできるなどの事例に併せて、幼児期における、望ましい人間形成にかかわる経験学習のあり方であろうと考える。

保育者は、また、自分のことと同様に相手のことを考えるばかりでなく、その相手と他のものとのかかわりについても考える心のゆとりをもつことが望まれる。即ち、保育者と一人の子とこの動きのない二者関係的な把握ではなく、「人とのかかわり」「物とのかかわり」「集団とのかかわり」「環境とのかかわり」をもつ個人として、三者関係、多者関係的な把握ができるということは、教師と子どもと親、教師と子どもと他の子ども、園と家庭と社会などの関係のない手となり、関係の発展をもたらすものとなることが期待されるからである。

三 個々の子どものレディネスがとこのう時をあせらず待ち、適切に成長の節をとらえることのできる保育者であること
現代の教育の場においては、しばしば子どもの欲求以前から、

目標に向つて訓練が開始され、なかば強制的に興味をよびさせ、学習経験をさせようとする傾向がみられる。このように、本人の欲求やレディネスにお構いなく開始された身辺自立の習慣や稽古ごとは、しばしば順調にすすまず、子どもは自信を失つて逃避しようとし、親は心のゆとりを失つて叱責、強制、命令のことでばかり返す。

このような状態は園での不適応行動となつて表出され、その原因が親子間の精神的な不安定から引きおこされたものであることを知らされる。このようにゆとりを失つた心に、子どもの成長の節を適切に見定めることは望めない。啜啄^{まろたく}同時の諺のように、保育者が心のゆとりをもつということは、卵の中の雛のどんなに小さな反応をも見逃さぬ細心の注意と、時が訪れるまで決して巢を離れず卵を抱いてじつと待つことのできる親鳥の忍耐の心をもつということである。

このことを、三歳の誕生日を迎えて間もないY子の事例から考えてみよう。

「かわいいウサちゃんのタオルケット」は、Y子の自己依存の根源であり、二歳をすぎる頃まで、「それさえあれば一人で居れる」代理ママ的な存在であった。親や周囲が「汚れているから」「一日中さわつてはおかしいから」手離すようにといえは、

ますます固執し、反抗した。しかし二歳の半ばをすぎて、Y子が最も望んでいた「次子誕生予定」を知らされた日から、Y子の心の葛藤がはじまった。

「タオルケットを手離すこと」が強要されなくなり、かわりに「お姉ちゃんになることへの期待」がかけられるようになったことが、Y子の心の内的葛藤の芽生えを促進する結果をもたらした。「お姉ちゃんだから、みんながおかしいというタオルケットを手離せないことからぬけ出さなければならぬ」という気持と「お母さんと同じように思つてきたタオルケットを手放すことは淋しい」という二つの心のたたかいは、弟誕生のその日まで継続された。服も靴も帽子も玩具も、よろこんで生れてくる赤ちゃんのために自分のタンスの中から選り出していたY子は、弟誕生が現実になったその時、「これも赤ちゃんにあげる」と自から宣言し、タオルケットを手離す決心がついたのである。

このように「心のたたかいに自から打ち勝つ」ことの経験は、仕組まれたレールの上のせられての経験学習の場合よりも、子ども自身にとって「自分できめて自分で実行し、成就した」という大きなよろこびと自信をもたらし、次の成長への大切なステップとなると同時に、退行現象への歯どめともなるように思われる。(この項つづく)

(西南女学院短期大学)